

都道府県・ 指定都市番号	23	都道府県・ 指定都市名	愛知県	研究課題番号・校種名	1 高等学校
				教科等名	国語科
研究課題	学習指導要領の趣旨を実現するための学習・指導方法及び評価方法の工夫改善に関する実践研究 「高等学校『国語総合』－文学作品を主体的、対話的に学ぶ試み－「富士」を手掛かりに」				
ふりがな 学校名（生徒数）	あいちきょういくだいがくふぞくこうとうがっこう 愛知教育大学附属高等学校(509名)				
所在地（電話番号）	愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢1（0566-36-1881）				
研究内容等掲載ウェブサイト URL	http://www.auehs.aichi-edu.ac.jp/				
研究のキーワード	<ul style="list-style-type: none"> ・文学的な文章の活用 ・「読むこと」の領域における指導の改善 ・伝統的な言語文化への関心を高める ・高大連携授業の実践（高大接続改革） 				
研究結果のポイント	<ul style="list-style-type: none"> ○ 文学的な文章を活用し、近代以降の文章と古典（古文）の学びとを効果的に結びつけることで、我が国の言語文化の連続性を学習し、関心を広げることができた。 ○ 高大連携授業を通して、文学的な文章の読みを深めるとともに、高大接続改革で求められている『学力の3要素』を育むことができた。 ○ 古典（古文）の学習において ICT を活用し、読みを深めるための言語活動の場を設けることで、伝統的な言語文化への興味・関心を広げ、古文の学習に主体的に取り組む姿勢を育むことができた。 				

1 研究主題等

(1) 研究主題

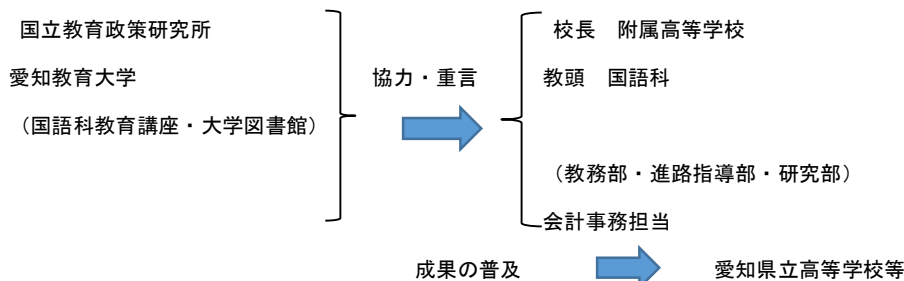
文学的な文章を主体的、対話的に学ぶことによって育成する言語能力を身に付け、作品の解釈を深めるとともに、我が国の言語文化への興味・関心を広げるための学習・指導方法及び学習評価の在り方に関する研究

(2) 研究主題設定の理由

本校の生徒は真面目だが自己肯定感が多くない者が多く、国語の学習においても自分なりの読みを深めていこうとするよりも、授業者による「正解」を求める傾向が強い。また、学習への意欲は低くないものの、語彙力や読みを深める力は必ずしも高くない現状がある。そこで、「国語総合」の学習指導要領における国語を「的確に理解する能力の育成」と「言語文化に関する関心を高め」ることに焦点を当て、解釈の自由度が高い文学的な文章を活用し、主体的な学びの実現を目指すこととした。そのため、まずは小説の構成や表現形式を正確に理解させることから始め、次期学習指導要領で新設される「言語文化」に向けて、近代小説と古典作品の比較を通して発展的な学習の場を与え、我が国の言語文化への興味・関心を広げさせながら、文学的な文章によって育成され得る資質・能力（比喩や象徴性の理解、自分にしかできない表現を模索する力。その上で、他者との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすること

ができるようになる)を身に付けさせ、ひいては自己有用感を高めさせる授業を開発したいと考えた。その際、古典と近現代の作品をつなぎ、複数の教材をつなぐ素材として、我が国の文化を象徴する「富士」を用いることとした。また、本校の各教室には、一昨年度からプロジェクターが配備されており、今回の研究実践においてもICTの活用に留意した。

(3) 研究体制



(4) 2年間の主な取組

令和2年度	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の実態把握 (国語についてのアンケート調査) 6月 ・ICT活用に関する校内研修 7月 ・先行研究実践の調査 6~9月 ・高大連携授業の実践1 (古典) 10月 ・上記授業を受けての作品の主題に対する解釈 (解釈の多様性を認めるとともに、根拠の妥当性を確認するためのグループ学習) 10月 ・高大連携授業の実践2 (近代以降の文章) 11月 ・上記授業を受けての意見の発表 (自己評価と他者評価の比較検討) 11月 ・近代以降の文章と古文の融合問題の出題 (ペーパー試験による評価方法の研究) 12月 ・授業アンケート 12月, 3月 ・事業の中間まとめ 3月
令和3年度	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の実態把握 (アンケート調査, 外部業者資料による分析) 4月 ・先行研究実践の調査と校内研修 6~9月 ・現代文・古文の読み比べの実践 6月 ・高大連携授業の実践1 (古典) (令和2年度との比較・検証) 11月 ・上記授業を受けてのグループ学習 (ICTの活用) 11月 ・高大連携授業の実践2 (近代以降の文章) (令和2年度との比較・検証) 11月 ・国立教育政策研究所視学官による学校訪問及び研究協議会の開催 12月 ・上記研究協議会及び視学官の指導を受けての指導内容・授業のあり方についての検討・改善 12~2月 ・事業2年間のまとめ 2月 ・事業の成果と課題を踏まえての、次年度「言語文化」の年間指導計画の作成 3月

2 研究内容及び具体的な研究活動

(1) 研究内容

① 文学的な文章を主たる教材として活用

「読むこと」の指導について、文学作品を主体的、対話的に学ぶことで学習意欲を高め、読みを深めるとともに、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」について、近代以降の文章と

古典とを融合させて学ぶことで、我が国の言語文化の担い手としての自覚を持たせることを目指し、研究を行った。

② 高大連携授業の実践

国立大学の附属高校という本校の特性を生かし、高大接続改革で求められている『学力の3要素』（1. 知識・技能、2. 思考力・判断力・表現力、3. 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度）の育成を目的とした高大連携授業の研究実践を「国語総合」において行った。

③ 伝統的な言語文化への興味・関心を広げるための言語活動の充実

「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」について、特に古典において高校入学時から苦手意識を持つ生徒が少なくないことから、古典に親しみ、興味関心を広げるための言語活動のあり方を検討した。

(2) 具体的な研究活動

① 文学的な文章を主たる教材として活用

文学的な文章を読み深めるための学習指導として、芥川龍之介『羅生門』と『今昔物語集』巻二九との読み比べの実践を行った。両者の相違点を確認し、その理由と効果を検証した。『今昔物語集』については現代語訳を適宜参照し、古文に親しむことと近現代の文学作品との関連について考えさせることを重視した。近代以降の文章の学びと古文の学びとを効果的に結びつけることで、我が国の言語文化の連続性を学習することができた。

定期考査において、それぞれの「門」の役割について、100字の記述問題を課し、理解度を検証した。本文から情報を抜き出し、整理することは大半の生徒ができていたが、「門」を抽象化し、「門」の象徴性について論じた生徒は皆無であり、課題が残った。

② 高大連携授業の実践

愛知教育大学国語教育講座の協力の下、古典と近代以降の文章においてそれぞれ高大連携授業を行った。古典においては田口尚幸教授から『伊勢物語』の複数章段をつなぎ読む視点や、『万葉集』をはじめ、『伊勢物語』以外の古典作品における「富士」の描かれ方についてご教示を頂いた。「富士」のような不変のイメージのあるものも、その象徴性は時代背景や書き手の価値観によって変化することや古文の解釈はひとつの正答に収斂するものではないことを学習した。それらの学びを踏まえた上で、生徒個々の関心に応じた課題を設定させ、『伊勢物語』の読み直しと意見交換を行い、読みを深める、関心を高めた。

近代以降の文章においては奥田浩司教授から文学理論の基本知識を教わり、太宰治『富嶽百景』を「コノテーション」という用語によって作品を整理し直す視点を学んだ。視点を変えることで作品の読みが変わることを実感し、読みを相対化することを経験した。その上で、「富士」に付与されたコノテーションについての理解を深め、生徒自身にとっての「富士」的なものは何か考察した。それぞれの考えをまとめ、発表・交流することで、主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度を育むことができた。

なお、当初の計画では、大学図書館と連携し、文献検索や文学研究の基本的な姿勢について学習した上で高大連携授業に臨むはずであったが、コロナ禍のため大学図書館が閉鎖され、叶わず、一部動画配信で代替した。また、大学の先生方による授業もコロナ禍の対応で全員に対面で行うことが難しかったため、一部クラスのみ対面で行い、他クラスは授業を同時配信するという形で行った。不満の声もある一方で、通常の授業では出席できない生徒も遠隔で参加することができ、他の複数校との連携についての可能性を感じる機会となった。さらに、研究協議会のための研究

授業も事前に動画を配信し、研究協議は遠隔で行った（視学官は来校）。

③ 伝統的な言語文化への興味・関心を広げるための言語活動の充実

『伊勢物語』について、自然や地理、文学、歴史、人物の心理描写等に関連づけて作品世界のイメージを広げ、それぞれの読みを深めるとともに、言語文化の特質や伝統的な言語文化への興味・関心を広げることを目的とし、意見交換の場を設けた。その際、事前に生徒の関心を把握し、関連するテーマ毎に班分けを行い、言語活動が充実するよう工夫した。意見交換に際しては、ICTを活用し（主に iPad の air drop）、生徒が入力した意見について電子媒体で閲覧できるように準備をした上で、班ごとの発表に繋げた。古文に苦手意識を持っていた生徒も、古文に積極的に関わろうとしており、古文の学習に取り組む姿勢の変化が見られた。

3 研究の成果と課題（○成果●課題）

- 授業アンケートの結果、7割の生徒が「作品の読み方が変わった・深まった」と解答しており、ワークシートの記述からも、それぞれの作品の世界が広がったことや多様な読みの可能性について経験的に学んだ様子が見えたと感じた。
- 「コノテーション」のような用語に引っ張られて、生徒の読解の幅を狭めてしまったくらいがある。用語を学ぶのではなく、読みを深めることを目的としていることを生徒に伝え切れていなかった。
- 授業アンケートによると、「古文」への関心が高まった、という回答が8割を超えており、伝統的な言語文化への関心を高めることが出来たと見える。
- 古文への関心は高まったものの、定期考査の結果を見ると古文への理解の深まりや知識の定着は不十分であることが分かった。個別の教材はあくまで「読むこと」の指導のきっかけであることに留意した授業作りが求められる。
- アンケート結果によると個々の作品についての理解は高まったものの、文学作品全般についての理解の深まりについては実感でいていない生徒が4割程度おり、汎用的な資質・能力の育成という点で課題が残った。
- 総合学力テストの総合平均偏差値が7月から11月で2.1ポイント、11月から1月で1.0ポイント上昇し、特に偏差値40未満の人数が半減した（15人から8人）。国語への関心が高まるとともに国語の学習に積極的に取り組む姿勢が身につく、基礎学力が向上した。
- 研究実践のための課題の設定や高大連携授業や研究協議会の準備等を通じて、教科内の教員の連携が深まった。
- 生徒の発表についての評価の妥当性について、検証が不十分であった。

4 今後の取組

- ・ 読みの多様性や、解釈の妥当性についての評価方法の研究。
- ・ 文学的な文章を読み深めることを通じて、解釈の多様性を認める態度を涵養するための授業づくりと改善。
- ・ 近代以降の文章と古典（とりわけ古文）を関連させた文学的な文章の授業実践を蓄積し、学習効果を検証する。
- ・ 「言語文化」に向けての年間学習指導計画の作成と改善。
- ・ 「読むこと」の授業において、読みを深めるための効果的なICTの活用についての研究。